

父もろともに
ことほなるらん』

ゆるぎなき御代

かるた遊び

あづま

かるたをとるとて

源氏平家と

きはひさいめく

むべ山風の

源氏の方の

秋の草木に

しをればてゝぞ

つどふ友どち
たち分れつゝ

聲ぞにきはふ

あれにあれつゝ

勝ちに勇めば

あらぬ平家の

かこち顔なる

ひとゝせ

つねを

うら／＼霞む春の朝

治まる御代のとほさを

青葉しげれる夏の暮

いつか涼しき橋の上

聲をさそひてうたはまし
鳴く鳥の音にあはせつゝ

星の光にあこがれて

登追ひ行く少女子と

空も露けき秋の夜の

頭に霜のかゝるまで

北風さむき冬の月や

語らふ折やいつのまに

花の下かげ池の水

夢見るまゝにかはりきて

うきことながき山鳥の

澄み行く月をながめつゝ

柴の戸閉てあたゝかく

雪に見なれぬ花の庭

月の光や雪の窓

ひととせながら面白し

お年玉

みづ子

小石川の護國寺の西に、杉の生垣を繞らした風

流な庭のある、小じんまりとした二階家に、長のス

ラリとした何處となく重々しい、年の頃五十許り

の奥さんが、たつた一人で住んで居りました。

此奥さんは元某大尉の長女で、十八の時、大

教育家といはれた〇〇女学校の校長松田秀雄の所

へお嫁に來たのでありましたが、今から三年程前

に良人に亡なられたので、今は只一人其の後に住んで居るのであります。

偕、此の奥さんは誰にでも温和く、貧困人には情をかけて遣り、又た近所の坊ちゃんや嬢さんには、お正月が来たからつては羽子板や獨樂を買つて遣つたり、お節句が来たからつては、雛様や金魚を買つて遣るといふ氣質でありましたから、近所の人々は皆な感心な方だといつて稱めて居りました、又た近所の子供たちは「松田のお婆さん、松田のお婆さん」といつて慕つて居りました。「松田のお婆さん」といふのは、此の奥さんの名が松田菊子といふのであつたからです。奥さんは子供たちが「松田のお婆さん、松田のお婆さん」といふと何時もニコ／＼して姪子様の様でありました。いや、唯「松田のお婆さん」といはれるのが

嬉しくつてニコ／＼するのではありません、人に情をかけ、嬢さん方を可愛がると、情をかけられ、可愛がられた人が喜ので、實は其が自分には嬉しくつてたまらなかつたのです、又た此を何よりの樂として居つたのであります。

偕菊子の家も、財産といつた所が秀雄先生の存命中時とは事違い、僅かに此の家と屋敷許りで外に何にも収入が有ませんから、嬢さん方に好きな物を買つて遣る事もなか／＼容易な事では無かつたのです、然れども菊子は自分の家を半分に離隔て其を人に貸し、其の屋賃を節儉して遣い、残り

銀の粉でも撒いた様に、地一面に霜が降つてピカ／＼光つて居る寒い朝、炬燵に差／＼て楽しそに談話をして居る二人の人がありました。一人は松田菊子で今ま一人は雪ちゃんといふ此處から十町程遠い所に住んで居る可愛らしい女の子でありました、雪ちゃんは父さんも母さんも亡くつて、叔母さんの厄介になつて居る子なのであります。「雪ちゃんは度々來てお呉ですが、何時でも面白事が無くつて不満ませんのねー、」「イ、エ、お婆さんさい居れば、私それで好いんですわ、私が來るとお婆さんは何時でもニコ／＼して居つしやるのねー、私、其が嬉しくつてよ、」「雪ちゃんが來てくれると私本當に嬉しいのですよ、毎日でも來て貰いたい位に思つて居るんですの……、私は雪ちゃんに本も買つて上たいし、學校

へも出して上げたいし、何でも雪ちゃんの爲になるものなら何んでも買つて上たいと思つて居るんですけれども、雪ちゃんの知ての通り、私は貧乏ですからねー、唯だ思つて居る許りで……」「お婆さんは私の事許心配して居らつしやるねー、そんなに心配して被下なくつても好くつてよー、……私はお婆さんの傍にさい居ればそれでいゝんですわ、外に何にも嬉しい事は無いんですわ、だからお婆さん私を何時迄も可愛がつて被下いな」と雪ちゃんは顔を少し傾けて、冷い眼で菊子の顔を見詰ました、——其は確に菊子の情を動したて有まじよー。
茲に二人の話は止んで、護國寺の觀音堂の鐘がポーン、ボンと聞へました。
「ア、私すつかり忘れて居ましたわ、今日から

お正月の仕度をするのだから、他處へ出てはいかんつて家の叔母さんに昨日いはれて置たのを……私だつてお婆さんの傍に一日でも居たいんですけれども、早く行かないとお叔母さんに又た叱られますから、モ一私販りますわ、と挨拶もそこ〜戸口の方へ出て行きました。

「お婆さん左様なら」と戸口でお辭儀して頭を上げますと、雪ちやんを送て出た菊子が直ぐ前に立つて居つたので、菊子が戀しくなり、家へ歸のも忘れて、きく子の顔をジツと見て悄然して居りました。此の様子を見て菊子は急に一層雪ちやんが可愛なつたのか、ズツと側へ近寄て雪ちやんの肩に手をかけ、自分の頬に薔薇の様な雪ちやんの赤い頬を押付て、シツカリ抱さしめました。

「雪ちやん、お正月には遊に來てふくれ、好いか

い？ 屹度ですよ」。

「エ、屹度上りますよ、お正月になれば他處へ出て叱られませんか……サヨナラ」と可愛らしい聲を後に残して、菊子の家を去りました。後に悄然、きく子は雪ちやんの後姿を見送つて居りました、頼雪ちやんは甲月堂といふ菓子屋の角を南へ曲つたので、モ一見えなくなりました。

「わの子は何とゆー善い子なんだろー、今年の夏患つた時なぞも、年の行かないに珍しい、能く細々と親切に世話してくれた、又常時いた所で私を實の母の様に思つて、家には實の叔母があるのに私許りを慕て「お婆さん々々々々」といつて呉るのだから、お正月にはせめて帯の一本位お年玉に上げたいものだが、悲しい事には肝腎のお金が；

……お正月といつてもモ一明後日となつてしまつた。

「ア、何故こんなに貧乏したのだらう！、旦那は大層お金を銀行へお預なすつた事も確かに有つたし、又た種々な道具も持ていらしたのだが、其を皆んなど一なすつたのだらう？」

と刻頭を垂れて居りましたが、ドツカリ火鉢の側へ坐つてジ一と火を見詰て居りました。

「ア、そ一、お年玉——二階の戸棚を探たら……」と獨言言いながら、二階へ上つて行きました。

餘程たつてから菊子は手に古い針箱を持つて下りて來ました、其は自分がお嫁に來た時に新調たので、モ一年が過つたから壞れかゝて居るので、仕方が無いから小切の入物にして置いたの有ました。此を其の目一杯かゝつて、割れた板を膠で貼

つたり、中の切を整然揃へました。

其の翌日——大晦日では有りましたが、菊子は家内たつた一人ですから別に騒も要りません……自分の針箱から針や糸、剪刀などを取出したり、又た髪の毛を集めて針襦を作らいたりしました。然したつた一つ足らぬ者が有りました——其は指套で有りました、三錢出してピカ／＼金光のして居る眞鍮の指套を買ひ、彌々皆な道具が揃ひましたから、此を針箱に詰て見ましたら、大層立派なものになりました。

二

御婚禮の席で、綿帽子を冠つたお嫁さんが、頸を垂れてお膝の上に眞白な手をついて居る様に、未だ建てた許の門松が、昨夕ふつた雪に埋れて、頭を垂れ白い手をついてあります。

目白臺から市街を望みますと、見渡す限り一面の銀世界で、ズーッと其極は一枚のテントを張つた様に真白で地か天か境が解らんです、天地共にダイヤモンドの宮殿の様である。此の宮殿の東にバアーと一面の紅い光が顯た時は眞に極樂の景かと許り驚かぬものは無かつたのです。

此の極樂の様な雪景の中を、指の尖を紅くして、其の赤くなつた指尖を、時々白い氣息で温めながら、頸を縮めて護國寺の前通を西へ向つて行く少女が有ます。菊子の家の前にイんで、ニコくと微笑しましたが、頓此の綿帽子を冠つた門松の間を通つて、下駄の齒に狭まつた大きな雪の塊を戸口の敷石で掃つて、急いで内へ駆け込みました。

「お婆さん！」と言ふと一所に障子を開けて坐敷へ上りました。

「お婆さんお目出度う座います……オホ、お婆さん笑つちや否だわ」

「雪ちゃん一人で笑つて居るんじやー有ませんか、私は少とも……」と菊子は可笑を制して微笑しました、——其の微笑の中には唯だ雪ちゃんの挨拶の可笑かつた許で無い、雪ちゃんが眞から可愛のと、お正月でれ目出たいといふ情が含まれて居たのでしょー、

「雪ちゃん今日こそお暇を戴いて來んでしょー、——？、アッー、そんなら一日遊で居らつしやいな！、今に雪ちゃんの好きな花ちゃんも其れからか向のうめちゃんも来る筈なのですから……、皆さんが揃つたら骨牌でもして遊びましょーねー。

今朝は何と寒いのだろー、マー炬燵でもして暖ろーじやありませんか。私しが火を炬燵へ取るか

ら、雪ちやん其處の櫓を持つて來てくださいな、其から彼處の戸棚を開けると蒲團が有りますから……」

二人の働で茲に漸く炬燵は出來て、二人は中へ入りました。

「お婆さん、此御覽なさいな、花ちやんのお年玉だつてねー、今朝花ちやんのお母さんが私に下さつたの、」と赤い少々な巾着を取り出しました。

「マー！好かつた事ねー、其の中へお錢が一杯入つて居たら猶いゝでしよー、」

「そんな好い事は有ませんわ、だつて母さんが居ないから、モーお錢なんか入て呉る人は有ませんわ、」

若し今頃母さんが居たら、羽織も帯も新らしく調いて戴けよーし、お小遣も澤山戴いて花ちやん

にもお年玉のお禮も出來よーに、母さんは何處へ何な所ろへ行つてしまつたのだろー、今頃は何時居らつしやるのだろー、と死でしまつた母の事を思ひ出して、一時に悲しくなつたのか早や目には涙が宿りました、菊子に顔を見られたので恥かしそーに側を向いてしまいました。

「此は大層好巾着だから、汚さずに大切に仕舞てお置きなさい、何時かお錢の入る事も有るでしよーから、……」とすかして居りましたが、急に何か思い付たのか、フイツと炬燵を立つて次の間へ入りました。

(つゞく)